

新刊紹介

ライナー・カーデンバッハ『音楽芸術作品——一つの非独断的音楽理論の基礎諸概念』

Rainer Cadenbach, *Das musikalische Kunstwerk — Grundbegriffe einer undogmatischen Musiktheorie (Perspektiven zur Musikpädagogik und Musikwissenschaft, Bd. 5)* Regensburg, Gustav Bosse Verlag, 1978, 192 S.

渡辺 裕

一見自明のように思われる「音楽芸術作品 (das musikalische Kunstwerk)」という概念は、その中に数知れぬ重要な問題点を孕んでいる。本書はこの通常無反省的に用いられる「音楽芸術作品」という概念そのものをあらためて検討しなおそうとする試みである。副題に添えられている「非独断的音楽理論」という語の中に、音楽に関する様々な理論化の試みの数には事欠かないにも拘らず、「音楽芸術作品」という基礎的な概念に関して千差万別の「独断的な」理論が乱立している今日の状況への著者の苛立ちが窺われる。

本書は体系的に構成された三つの章から成る。第一章では「音楽」の概念がいかなる規準によって成立するかが検討される。第二章では第一章で規定された「音楽」の概念がいかなる規準のもとに「音楽作品」の概念に至るかが検討される。最後の第三章では第二章までに規定された「音楽作品」の概念がいかなる規準のもとに「音楽芸術作品」

の概念に至るかが検討される。副題に示された「基礎諸概念」とはこの「音楽」「作品」「芸術」の三つの概念に他ならぬ。

第一章で著者はとりあえず音楽の規準を可聴性にもとめることから出発するが、これだけでは音楽を他の音響現象と区別することはできない。そこで著者は素材自体の物理的性状による音楽の概念規定を放棄し、ハルトマン

Nicolai Hartmann の層理論を援用しつつ、ここでの可聴的素材を「客観化された精神」として規定し、自然音と区別する。しかし言語もまた可聴的な「客観化された精神」であり、基体 (Substrat) だけの考察によって音楽と言語を区分することはできない。そこで著者はこの両者を意味の媒体 (Medium) としての側面から考え、言語の場合に基体の物理的性状は媒体としての効果に直接関らないのに対し、音楽の場合には基体が互換不能であるため基体と媒体とは一致する、とする。これらのことより「音楽」は「その可聴的基体と一致した音響的媒体」として定義されることになる。

続く第二章では著者は「音楽」が「作品」となるための条件として単なる企図としてではなく現実化し固定されたものとして存在すること、その現実化の発起人が存在すること、それが一つのまとまった全体として考えられることなどの条件を検討する。そして著者はこれらが満たされるような特殊な全体性を、ヘーニヒスヴァルト (Richard Hönigswald) のゲシュタルト論を援用しつつゲシュタルトと呼ぶ。それは「外延をもつ産み出され基礎づけられた全体性」である。著者は解釈者との関係のあり方に応じた作品の三つのタイプを設定するが、そのいずれもが、誰の手によってであれ、このゲシュタルトが形成されることを要求しているのである。

最後の第三章ではそれが「音楽芸術作品」となる規準として判断 (評価) の問題が導入される。「音楽作品」は判断を下されることによって「音楽芸術作品」となる。ここでの判断は聴き手の行なう美的判断 (趣味判断) と芸術学的判断とに分たれる。後者はさらにゲシュタルト関与判断、様式関与判断、意味関与判断に分たれ、これらの判断を

介して内的連関としての音楽作品は他の作品との関り（伝統、影響）、世界との関り（内部世界、外界）を獲得し外的連関のうちにおかれるのである。

以上に概観した著者の論述は、その対象自体が最終的には美学上のあらゆる問題を引き受けざるを得ないものであるが故に、やや粗略にすぎることが否めない。しかし本書は音楽芸術作品という基礎的概念の検討を足がかりにして様々な問題の所在を一つの体系のうちに鮮やかに浮かび上らせていると言えよう。